



TITLE:

人文 第24号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第24号. 人文 1981, 24: 1-32

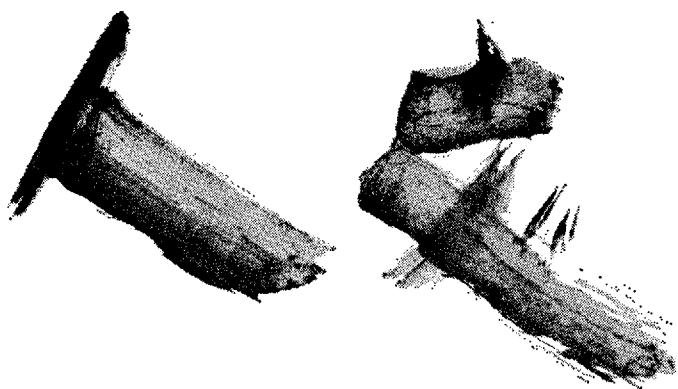
ISSUE DATE:

1981-09-19

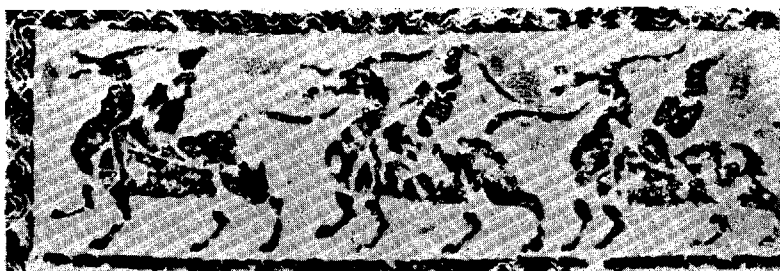
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57150>

RIGHT:



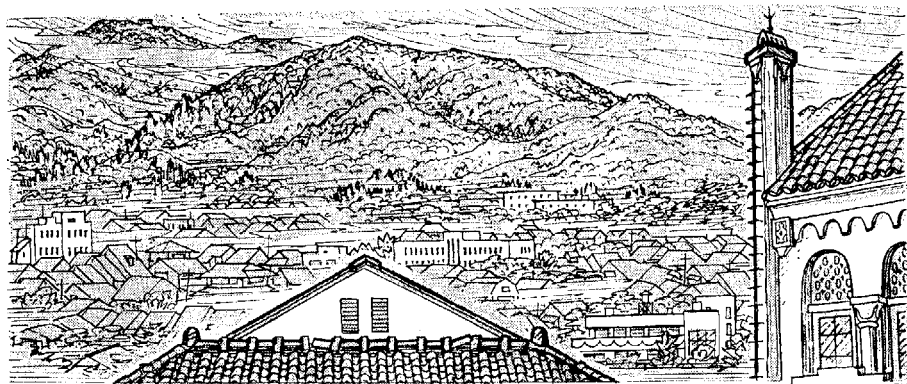
第 二 四 号



1 9 8 1

京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X



人 文 第二号

1980年12月—1981年5月

も く じ

随 想

中国からの手紙

上山 春平

ガイジンデアルコトニツイテ……チャールス・D・シエルダン

金持ちも辛い

浜田 正美

講 演

退官記念講演

運動史研究三十五年

渡部 徹

現代家族法の課題と展望

太田 武男

世界資本主義と農業革命

飯沼 二郎

本のうわさ

飯沼二郎『日本の古代農業革命』（中村）・多田道太郎『文章

術』（村田）・吉田光邦『中国の構図』（樋口）・竹内実『友好

は易く理解は難し』（杉本）・上山春平『城と国家』（江村）

共同研究の話題

言、典ニ関ワラザルハ君子ノ所談ニアラズ……

柳田 聖山

国家と私人……

山下 正男

「情報の社会変動力」雑感……

溝部 英章

旅

モスクワの秋と冬（竹田）・旅に病む（多田）・蜀大日に吹ゆ

（森）

書いたもの一覧

おくりもの（25）・お客さま（26）・人のうごき（26）・東洋学

文献センター講習会（27）

中国からの手紙

上 山 春 平

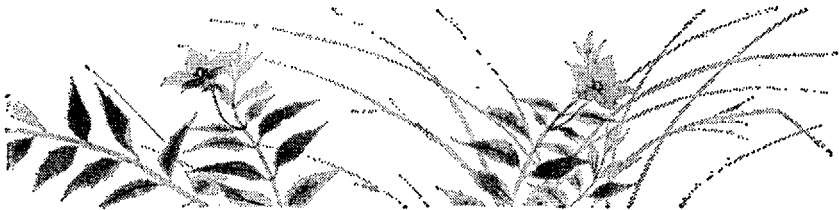
中国に、『哲学研究』という雑誌がある。数日前、その編集部から、一通の手紙がとどいた。

それによると、今年の春、中国に、「日本哲学会」が成立し、九月に第一回の会合を開くことになっているらしい。その前後に、日本哲学にかんする論文を雑誌にのせたいので、寄稿してほしい、というのが手紙の要旨であった。

まことに光栄な話であるが、私は、考えこんでしまった。当の日本にさえ、日本の哲学を研究対象とする学会は、私の知るかぎり、まだできていない。

日本では、哲学研究（ほとんど哲学史の研究）の主流は西洋哲学の研究であり、これとは独立に、中国哲学とインド哲学の研究が進められている。これらについては、大学に講座が設けられているのだが、日本哲学の講座というのは、きいたことがない。

こうした実情は、日本の哲学が、講座や学会を作って研究するに足る歴史をもっていない、という通念に支えられており、この通念は、いまのところ、動かしがたい印象をうける。そして、私自身、これをくつがえすに足るだけの反証を用意しているわけではない。だから困ってしまうのである。



私は、明治以降の日本における哲学研究が、西洋哲学とならんで、中国とインドの哲学を大切にしてきたのには、それなりの理由があり、日本の哲学をかえりみるとまがなかったのは止むを得まい、と思っている。

しかし、私自身としては、日本において哲学することの意味を問うようですが、明治以降の先輩たちが、どのように西洋の哲学を受けとめてきたか、また、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、そして江戸時代の人びとが、どのように儒教や仏教を摂取してきたか、を問わずにはおられなかった。

こうした問いかけが積み重ねられれば、それは、日本哲学の研究みたいなことがいならぬわけではない。私は、こうした形で、日本哲学の研究とある種のかかわりをもつ結果になってしまった。

しかし、こうした私自身の流儀を、中国の方々におすすめするわけにはいかない。私としては、とくに、中国の哲学思想が日本においてどのような受け入れられ方をしたか、という問題をめぐって、日中両文化の相違点と共通点にかんする理解を深めていただくことができたい、と考えている。

ガイジンデアルコトニツイテ

チャールス・D・シエルダン

人々は、多く、自分が外人であると考えたことはないでしょう。永年英国に



住んでいるハンガリア人、ジョージ・ミケシュは、英国の娘と結婚すると決定した時に、お母さんにそういいました。お母さんは「どうして外国人と結婚するか。自分の国の人と結婚する方が良いでしょう。」といいました。彼はその婚約中の女にさういうと、大変おこって、「私は外国人じゃない！ あなたが外国人です！」といいました。日本の人は外国へ旅行する時にも、自分がガイジンであると考えないでしょう。かえって、ガイジンが多いね、と思うでしょう。

その点では、私は少しちがっていると思います。ある程度まで、どこへ行っても、ガイジンです。自分の国でもはじめてガイジンであると感じたのは、英国で五年間生活してから米国へ帰ったときでした。英国では、できるだけ相手が私のいっていることがはっきり分るために、しらずしらず私の英語は少しずつ変わっていました。英国では、すぐに、米国の人がカナダの人か分りますが、それでも私は、一種の大西洋の真中ぐらいの英語をはなすようになりました。しかし米国では、人々は私に、どこから来ましたか、というような質問をよくしました。ある店の女の人は、どこの国の人かともたずねました。

日本では、まちがいはありません。ガイジンのように見えるから、たしかにガイジンである。たびたび、子供達は私を見て、変な顔をして、「ガイジン！」といえます。それはかまいません。たやすいです。米国に生れて、日本に全部で五年間ほど滞在して、英国に二十年間。フランスに数かぎりないほどいきました。そこで、家内の家族の一人として歓迎されております。うちの娘がいうとおり、私のフランス語は完全ではないが、それでも歓迎を受けます。住んでいるような気楽な感じですよ。家内はフランス生れ、息子も日本、娘は英国で。

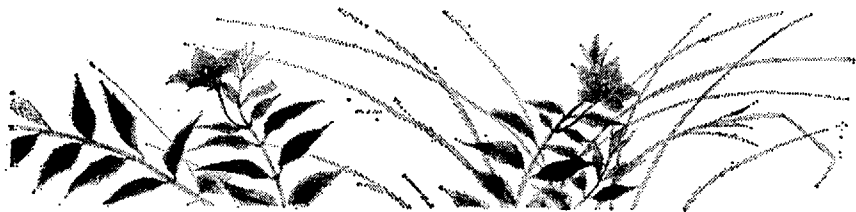


日本では必然的に外国人であると感じますが、皆気楽な生活ができます。

東京かほかの遠いところからの日本人の友達を京都案内をするときがよくあります。通りかかった人に道のことを聞く時に、普通に私に返事しないで、全然口をきかない日本人の友達に返事します。一度は、日本語の殆んどできない中国人と一緒にの時に、同じことがありましたが、変なことがよけい変になりました。こういう様な経験で、我々は日本にいる時ガイジンであると感じます。

ところが、外人であることは、便利なことがあります。もし食事、習慣、一時的な流行などにきらいなのがあるとき、食べなくても、使わなくても平気です。普通の人とちがっているから、すぐゆるされます。日本では、刺身・漬物をたべない日本人を見たことがあります。たべると人が期待するか、愛国心で食べているか分りませんが、私は刺身はおいしいと思わないが、食べられます。漬物は好きじゃないといっています。外人だから心よくゆるして下さいます。それから、英国の近所の人が、もし皆なテレビを持っていても、私達が買うかどうかという決定には一つも影響しないのです。二十年間テレビなしの生活を幸福にケンブリッジでしたが、それが変におもわれなかったでしょう。そう思われても一向かまいませんが。

前にいった様に、日本の子供達に「ガイジン」といわれてもかまいません。しかしせんだって、伏見で、いたずら小僧はその友達に注目させるように「変な人！」とどなったのです。私はふり返って「ちがう、一つも変じゃないよ！」といいました。しかし後で考えて、もし「変な人」というのは、普通の人と変っているという意味なら、正しいかもしれませぬ。



金持ちも辛い

濱 田 正 美

昨年は半分をトルコ共和国で過した。トルコの人々の日本に対する関心は旺盛だ。それは御多分に洩れず、先ずは「日本製品」の所以である。が、彼らの関心は単に「製品」に止まらない。大平首相の死が報ぜられた後しばらくは、どこへ行っても、どうしてお前たちは死体を焼くのか、という質問攻めに会った。最後の審判を信ずるムスリムである彼らにとっては、火葬はスキャンダル以外の何物でもない。カテキスムを心得えた彼らを前にして、非宗教的人間は、大汗をかきつつただただ閉口する外なかった。

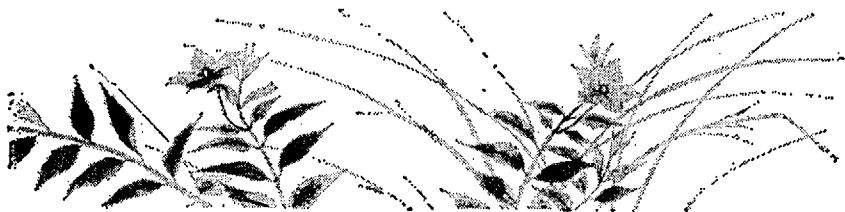
大平氏の火葬より、更に閉口させられた問いがあった。お前の給料は幾らかという質問である。農民、車の運転手、博物館の用務員、大学の助手、その他諸々の人々から、この問いを受けた。単純に換算すれば、我が日本国の大学助手の給料は、トルコの国会議員のそれに相当する。それ故正直な答えは、相手を驚かせてしまう。そこで急ぎ注釈を加えねばならない。曰く、日本の物価は高いんだよ。アパートの家賃しかじか。肉一キロしかじか。そして西瓜の四分の一がしかじか。最後の西瓜の値段、——しかもそれが、四分の一ずつ売られているという事実——に至って、相手も日本の物価というものが、自分たちの



想像を絶するものだということを理解し始める。

だが、これらの注釈を加えつつ感じた一種の後めたさは、一体何に由来するものなのか。俺の国は貧乏で、と言う人々の前で、いや日本だって、俺の子供の時分は、随分とひどいものだった、と言いつつ感じた気恥しさの正体は何なのか。

桑原武夫先生は、南北問題について、「辛いことではあるが、金持ちになってもあんまりええことおへんと、貧乏人に向って言わんならん時が来た」と述べられたと聞く。池田倍增政策以来、世の中何やら浮かれ騒ぎ続けたあげくの果の、現在の「繁栄」であって見れば、決して他所様にお勧め出来るような代物ではない。だが、しかし既に浮かれてしまった者たちが、自分たちの浮かれ騒ぎを清算することなしにたとえ虚妄であろうとも、如何なる「繁栄」とも縁の無かった人々に、金持ちも辛いでっせと言ひ得るだらうか。トルコの人々を前にしての気恥しさは、当面解消しないように思われる。（誤解を避ける為に、敢えて申し添えますが、この国の社会において、大学の助手は依然として歴々たる貧乏人であります。念の為。）



講演

退官記念講演



五六年三月二〇日

於本館大会議室

運動史研究三十五年

渡部 徹

(1) 研究の動機 戦時中の京大経済学部学生のところ、

社会政策研究を志し、大河内一男『社会政策の基本問題』に心酔、これを敷き写しにしてゼミ論文「日本労

働政策史」を書いた。その後、『資本論』によって検討し直すと、工場立法成立の必然性を資本の論理に求める大河内説に対し、マルクスは過剰人口の存在を理由に、「資本は労働者の健康と寿命とに対しては、それを顧慮することを社会によって強制されない以上は何等顧慮しない」と、階級闘争に必然性を求めている。これより階級闘争を最重要視すべきであると考え、関心をよせたが、兵隊にとられ中断された。

(2) 前半期 一九五五年七月末の日共六全協、五六年二月のソ連共産党第二〇回大会でのスターリン批判が画期である。ここまでは共産主義・前衛党信仰、スターリン崇拜に骨がらみであった。四六年二月小山弘健氏に紹介され、社会経済労働研究所に参加し研究生活に復帰し、日本の社会運動史研究にとりくみ、四七年一月、小山氏と共著で『近代日本労働者運動史』を、五四年七月には全協史を中心にした『日本労働組合運動史』を刊行した。いずれも革命史観に立ち、運動を政治主義的に評価したもののだが、両著とも日共から誹謗中傷された。にもかかわらず、コミンテルン、スターリン崇拜はゆるがなかった。

(3) 後半期 スターリン批判を契機に革命史観から解放され、戦後当初からの念願である組合戦線の統一を追求した。提起したのは企業別労働組合の産業別脱

皮と、統一と団結の強化の道である。政党と労働組合との関係をめぐる日本の特色、日本での労働組合論のひずみ、大衆団体において特定政党支持を機関決定する誤りなどを歴史研究、現状批判をつうじて精力的に明らかにすることに努めた。

残念なことは、企業別組合の脱皮、組合運動の統一と団結の強化、政党と組合の関係の改善など、私の主張してきたことは、実現の方向ではなく、むしろ逆行し、近い将来に明るい見通しをもちえないことである。空しい思いを禁じえない。

せめてもの救いは、研究所在職三二年をつうじ、両大戦間の日本社会運動史関係の史料を相当ていど整備しえたことである。内外の研究者の活用を期待したい。

現代家族法の課題と展望

太田 武男

一 戦後における民法とくに家族法の改正は、日本国憲法のもと、個人の尊厳と両性の本質的平等を志向

したものであった。明治民法の家・戸主・家督相続に關する一連の家本位的・男尊女卑的な諸規定が改廃の運命をたどらざるをえなかったのは、そのためであった。しかし、右の改正はそれのみを志向し、しかも、極めて早急の間に行なわれたものであったために、立法的解決を要する多くの問題が残される結果となった。

昭和二年より、法制審議会において、戦後の改正民法親族・相続編（家族法）の再検討が行なわれ、昭和三七年には、そのうち実務処理上急を要した若干の問題や戦後新たに登場した問題に対処すべく若干の改正が行なわれた。そして、さらに昨年（昭和五五年）には、配偶者とともに妻の相続法上の地位の向上と、形式的平等主義に立脚した諸子均分相続制度から生ずることあるべき実質的不平等の是正を志向した寄与分制度の新設を含む相続法の分野の改正なども行なわれてきたが、それら一連の改正で、そのすべてが解決されたわけではなかった。

二 具体的には、（一）婚姻法の分野における夫婦財産制の問題とくに別産・別管理制を別産・共有制に改正すべきでないかの問題、（二）親子法の分野における客観主義的親子観導人や子のための養子法の理想実現の問題、（三）相続法の分野における法定相続と遺言相続との関係や遺言制度自体の在り方の問題を如何に解決する

か等々の基本的問題が残されている。また、各論的な問題としては、嫡出否認制度の問題、夫婦共同縁組の問題、配偶者の代襲相続権の問題、遺産管理人制度の問題、遺言の方式緩和の問題等々、今後検討を要する問題は枚挙にいとまがない。さらにまた、一方では、明治民法の段階においてはもちろん、戦後の民法改正の段階においてもとくに問題たりえなかったが、その後の社会情勢の進展のために、戦後年浅き当時としては予期していなかった事象も発生し、それらのために、それに即応した立法措置の必要性が生じている問題もある。面接交渉権の問題、嫡出宣言の問題、特別養子制度の問題、人工授精子の問題等々が、それである。

三 したがって、右の諸問題の解決こそ、われわれ家族法学者に課せられた課題であらねばならないが、戦後もすでに三〇年を経過し、その間、家族法の領域においては、右に述べた如く数度の改正も行なわれ、また、法制審議会民法部会身分法小委員会においては、すでに一応、逐条審議も終え、問題点の指摘も行なわれている（昭和三四年のいわゆる「仮決定及び留保事項」の発表）現段階である。だから、このあたりで、過去三〇年の歩みを顧み、かつ世界各国における家族法の動向をも考慮した上、今後、わが国の家族法（民法の親族・相続編）は、全体として、どういう方向に進む

べきかという一つの理論的な基本線をたて、それと現実との関係をどのように調整していくべきかの点に注意を払い、理論的にも実際のにも筋の通ったものを基本において、再度全面的に検討・審議を行ない、残された右の如き諸問題の立法的な解決を試みるべき時期に來ているのではないかと考えている。そして、右の諸問題の解決こそ、われわれ家族法学者に課せられた課題ではないかと考えている（詳しくは、拙稿「現代家族法の課題と展望」人文学報五〇号一〜三〇頁所収参照）。

世界資本主義と農業革命

飯 沼 二 郎

農業革命とは、新農法が案出され、次いで、それにふさわしい新農村社会が創出されることによって、新農法が急速に普及し、農業生産力が急速に発達する過程をいう。世界資本主義とは、二国以上の国民経済が国際分業論によって結合せしめられる経済体制をいうが、それが形成される過程において、次々に、農業革

命がひきおこされる。

産業革命直前のイギリスの農民は、村落共同体と農村家内工業（マニユファクチュア）によって生活していた。イギリス産業革命は、これらの農民の生活基盤を破壊し、農業革命を促す。すなわち、技術的には、従来の自給自足の農業から、都市の商工業者のための商品生産的農業へ、また社会的には村落共同体から地主・資本家・労働者へと転化する。

さて、世界資本主義は、イギリス産業革命から始まる。当時、イギリスは世界唯一の機械制工業の国として、相手国から農産物を輸入する見返りに、相手国へ工業製品を輸出する（国際分業論）。そのため、相手国では、イギリス国内で産業革命によって農業革命がひき起されたと同じような変化が促される。すなわち、農村家内工業（マニユ）と村落共同体が破壊され、技術的には、従来の自給自足の農業から、イギリスの商工業者のための商品生産農業へ、社会的には、たとえばドイツでは、先進地域では地主・近代的小作人へ、後進地域では地主兼資本家・農業労働者へと転化し、またインドでは、ドイツと全く異なり、高率現物小作料を収取する地主と生活程度の低い小作人へと転化する。このようなドイツとインドのちがいは、何よりもまず、両者の風土のちがいに基づく農業技術のちがひ

によるものといえよう。

そして、インドの場合には、マニユはほとんど完全に破壊されるが、ドイツの場合には、先進地域のマニユが部分的に残り、これがドイツ資本主義の萌芽となる。

日本は、ドイツ型に近いが、地主・小作関係の形成はインド型に近い（インド農業と日本農業の類似）。つまり、世界資本主義による日本の農業革命は、ドイツ型とインド型の中間形態といえよう。

朝鮮でも、日本資本主義によって農業革命がひき起されてから（自給自足の農業から、日本向けの米と綿による商品生産的農業へ）、社会的には、朝鮮人の中から高率現物小作料を収取する地主を創出すると共に、日本人自身がそのような地主として直接、朝鮮に進出する。インド型であって、それ以上に激しい収奪を朝鮮に対して行ったのである。

本のうわさ

飯沼二郎 『日本の古代農業革命』

(B6版、二三二頁、筑摩書房)



私はかねがね飯沼さんの農業技術史論を見事だと思い、感服している。その特徴は、農業技術史を風土論(自然条件論)と結びつけているところにあるといえるだろう。若い頃『農業革命論』を読んだ時に受けた、目を洗われるような爽快な感銘を今も覚えているが、ヨーロッパないしイギリスの自然条件とそれに適合した農業を踏まえた上で、農業革命と呼ばれる農業技術の発達が説かれていて、その論述は立体的で、かつ明快そのものであった。農業は自然に依存してそれを利用するものだから、農業技術が自然条件に即して把えられねばならない

のは当然といえば当然のことであるが、そのような類の農業革命論の書がなかっただけに、いたく感銘を受けたのであった。その後飯沼さんは同じ思考法をグローバルに拡大して、世界各地の農業史ないし農業技術史を論じられたが、自然条件論と結びつけられた農業技術史の部分は、私にとって常に面白く、有益であった。

本書でも、マルトンスの乾燥指数なるものに他の条件を加えて世界の農業を四地域に分け、その上で稲作の起源から東南アジアでの常湛法の成立、中国での中干法への改変、南朝鮮を経てのその日本への伝播が

論じられていて、稲作の発達史、技術史としては大変明快で興味深い。世界農業の四地域区分論は前に飯沼さんの著書で読んだことがあるので、こと新しい論とはいえないだろうが、中国の稲作論は本書で一番力を入れた部分ではないだろうか。日本への稲作伝播の経路についてはいくつかの説があるようだが、本書で取られた南朝鮮經由論は、それで他の説が論破されたという程に論証が完璧であるわけではないとしても、最も有力な説となりえたのではないかと私は受けとれた。

けれども、これはいつも感ずることだが、飯沼さんは農業技術を越えて社会体制や政治を論じられ出すと、納得的でない論法につき当る。本書でも、稲荷山古墳出土の鉄剣銘文の解説に刺戟されて、日本への中干法稲作の伝播と倭王朝の発展を結びつけて論じたいという意欲にかられてか、政治史的な叙述が多いが、その部分は無理が目立つ。そのような意欲や色気は抑えて、稲作技術史に徹したほうがよかったのではないだろうか。また、ことのついでにいわただければ、書名の『日本の古代農業革命』の「日本の」はいささかオーバーない

し過小であり、「農業革命」はセンセーションナリズムに過ぎはしないだろうか。山氣抜きにつければ『アジア古代農業史』とで

多田道太郎『文章術』

書き出しに悩むという人は、じつは書くことがないということです——書評の締切り日が迫り、さて何をどう書こうかと思案にくれていた私は、心得第三条冒頭の一文に出くわして面喰った。書評をわりあてられた以上、そうですかといってひきさがるわけにもいかない。

書きにくいけれども書かなければならないという「矛盾した状況」にあるのは私ばかりではない。礼状、わび状、依頼、伝言、書類コミュニケーションの手段として電話が普及した現代社会にあっても、日常生活のなかには、文章を書く（書かねばならぬ）機会がまだまだ存在する。手紙はその筆頭にあげられよう。本書は、手紙の楽な書き方に始まって、「自分史」を書くに

もうい壮大な書名がふさわしい。

（中村賢二郎）

（B6版、二四〇頁、潮出版社）

たるまでの、「文章術」七カ条を説いている。もともと現代風俗研究会「文章教室」でおこなった講義録である。

著者は「文章教室」参加者の作文や新聞のコラムなど手ぢかな文章を例にとりながら、良い文章、悪文、名文の違いを指摘している。句読点のうち方、助詞や接続詞の使い方、文の終わり方など、微妙なところが文章の印象を左右するものだそうだ。ふだん何気なしにうっていたテンやマルが、ことに重要な役割を果たしているのだ。

良い文章を書く集団として、著者は作家ではなく新聞記者をあげている。良い文章とは、ここでは、「達意」、「おもしろい」、「間違いが少ない」の三条件を満たしているものをいう。そういわれると、新聞を読

んでいて、何のことやらわからずにイライラしたという記憶はない。名文は個性のにじみでた文章のことである。本書は文章道初心者むけの本のためか、この辺の記述には少し物足りなさも感じる。

われながらほれられするような文章が書けたら、いつも私は思っている。今まで書いた文章は、名文への憧れを反映してかあとで読むと面はゆくなるような「美文調」ばかりである。「余計なもの」が多く、文が長く、カタカナも多い私の文章は、「文章教室」では悪文の見本とされるところだろう。

自分の文章の欠点はなかなか気がつかない。ひとから指摘されることも少ない。だからこそ自分の文章には、もっと気を配らなければいけないと思う。「書いている御人だけは、えらい別嬪やなと思ってるのだけれども、ほかの人にはぜんぜん別嬪に見えない」ようなひとりよがりの文章を書かないために。

「わかりにくい悪文を書く人が多い」学者集団のはしくれとして、私は本書からこんな教訓を学んだのである。

（村田裕子）

吉田 光邦『中国の構図』

(A5版、三〇〇頁、巖々堂出版)

この春、重慶の人民礼堂で上海ラジオ・テレビ芸術団の音楽会を鑑賞した。感想は多々あったが、とりわけ演奏された曲の《出自》に興味をひかれた。

中国(少数民族を含む)のものが最多なのは当然だが、それ以外の第一は台湾、インドシナがこれに次ぎ、あとは東欧、西欧(日本も)、第三世界を網羅していた。むしろ問題は代表をひとつも出していない国で、ソ連、ベトナムはこれまた当然としても、カンボジア、朝鮮の曲がないのが注目された。

いわば遠交近攻(ないしは近争)という現代化中国のめざす外交の「構図」をかいま見る思いがしたものだ。

おなじ訪中といっても素養に大差のある場合、どんな構図がえがかれるか。それが本書を手にしての私のつぶやきだった。

開巻へき頭、「演劇的空間」としての天安門広場のうちに中国人特有の「空間感覚」が指摘されている。「つねに個人よりも集団を考えねばならぬ」マスのとしての人間が登場したときにのみ、はじめて完成するデザインを要求するそれは、「政治的空間」でもある。

そして吉田さんは続ける。この政治的空間の「周辺にはやはり人間の世界が明滅する。演劇的空間を成立させる奈落のよう」に」と。

この『中国の構図』は、いわば全巻、この「奈落」たる「人間の世界」にありわたり、本舞台たる「政治的空間」に關説するところはけっして多くない。この点に、読者の味読すべき本書の特色を見てとらねばなるまい。諸賢が直接に接せられんことを望みたい。

私は、いまモンテスキューを研究しているが、彼の《視野構造》とでも言うべきものにとり憑かれている。要は、彼に見えるものよりも、見ないもの、見えないもの、見ようとしなないものへの関心である。そこで吉田さんの視野構造をデッチ上げることにもなったのだが、ところでさて、中国人の視野構造はどうか。

中国の博物館についての指摘がある。中国以外の博物館のような「多様な文明の併列」「文明の相対的展示」はなく、「みずからの文明以外のものをいっさい展示」せず、自国「一個の文明にのみ固執」する。「しかし自国の文物の歴史にのみ親しんで成長していったとき、この多様化した世界の文明に直面した折に、それに適応できるだろうか。」

「ある種の無気味さに似たもの」を感じる吉田さんは、右の指摘をふまえてであろう、「あとがき」で、この「拒否の姿勢」のゆえに、中国の「次代の文化の担い手たち」についての懸念を表明されている。奈落から本舞台を見る本書からくみとるべき最大の示唆と言えようか。

(樋口謹一)

竹内 実『友好は易く理解は難し』

(B5版、二五一頁、サイマル出版会)

同時代のできごとを学問の対象とすることは、一般的にも非常に大きな困難がつきまとうものだが、その対象が現代中国となれば、その困難はもはや不可能に近いものにすらなってくる。本書の著者もそのまえがきで「中国のことは、じっさい、わからない」という「実感」を素直に述べている。

たしかに、現代中国のここ十数年間にわたるあまりにも激しい変化を見、またそれに従って右往左往するサーカスの曲芸師のごとき人々を見てみると、これが学問の対象となりうるとは到底思えない。にもかかわらず、学問と呼びうるに値するものは、私のごとき凡人のそうした思いを越えたところに成立するものであろう。本書の場合それを支えているのは、さきの言葉とはうらはらに、現代中国を理解しようとする自信と、そうしなければならぬとする情熱と

である。さきの曲芸師とは違って「この書を絶版にすることはしないという考えが自分のなかにあることをみとめることができた」とはつきり言い切るだけの自信が本書を貫いている。

さて、著者の提示する現代中国理解の枠組みは、人口・人材・人権というその人間的要素である。最近のポーランドにおける事態の中でも白日の下にさらされたように、このうち後二者は、他の社会主義諸国においても通ずる側面である。私などは、ついこれこれを現代社会主義の諸問題として一般化して理解したい誘惑にかられてしまう。しかし、著者は、ここで人口問題を最初に位置づけていることから窺われるように、あくまで現代中国の問題として見すえているようである。

文化大革命という歴史の大うずに、幸か

不幸か巻きこまれることのなかった私ではあるが、本書を読むことによってあらためて中国現代史における振幅の大きさを再認識せざるをえなかった。それは、本書の中で著者が書きしるした諸事実によってのみではない。むしろ、そうした大うずに巻きこまれぬよう、それでいて最大限近くによって観察・分析しようとしている、その必死の態度によってである。理解する立場の自主性と一貫性を失って、その大うずにのまれ、あるいはその底深く沈み、あるいは曲芸師となりさがった「研究者」が少くなかったことは周知の事実である。本書は、そうした大うずを乗り切った自信を伝えてくれ、そうした学問の在り方を教えてくれた。

(杉本俊宏)



上山 春平『城と国家―戦国時代の探索』

(B6版、二二頁、小学館)

上山さんによると研究所北白川分館のすぐ東北にある何の変哲もない瓜生山という小山が戦国時代の山城であるという。もうかれこれ三、四年前になるであろうか、ある初夏の一日、考古学の林さんといっしょに上山さん自身にその山城を案内していただいた。本書に記されているとおりに、山中越の「身代り不動」の所からとりつき、順に削平された曲輪跡や土塁、堀割りなどについて一丁寧に説明していただいたが、それら個々の普請は小規模ではあるが全体的にみてかなりの規模の山城であることが実感できた。この瓜生山の山城は、上山さんによると、文献には北白川城としてあらわれその位置も大体推定されていたが、その城構え全体を明らかにしたのは自分が最初であるとのことであった。そして、この他にも大文字山と嵐山に文献にもみえる山

城を確認しているという。中世史家でもない上山さんが専門家を出し抜いた形でこれらの山城の位置を確認し、縄張図まで作成されていることは率直に言って大変な驚きであった。しかし、こちらから突っ込んだ質問もしなかったこともあって、山城探索が上山さん自身の学問にどのようなかわるのかよくわからなかった。その時はふだんあらゆるものに対してみせられる例の好奇心の一つのあらわれだろうぐらいに考えていたと思う。ただ、山歩きの出立で高度計まで携えた一人山中を歩きまわっておられる姿を想像する時なにかただならぬものを感じはしたが。

しかし、本書によって上山さんのこの奇異とも思える行動の理由はすべて了解することができた。この書はまさにそのライフワークともいえる壮大な国家論研究の現時

点における到達位置表明の書である。上山さんは、その国家論研究において一指標とする律令体制の確立を古墳から塔へという権力集中のプロセスの中で考えるが、それと同形のプロセスを山城から天守閣へという推移の中に認め、そこから幕藩体制の確立を考えようとしているのである。前者についてはすでに『埋れた巨像』において藤原不比等論という形でその一面がみごとに描き出されたわけであるが、山城とかかわる後者については徳川家康論という形で追究するつもりであることを言明されている。家康については、これまで歴史上の「巨像」として論じ尽された感があるが、それだけに従来と異なるどのような家康論が構成されるかよけいたのしみである。

なお、表紙の北白川城縄張図は上山さん自身の作成によるという。いかにも山城にける情熱のうかがえる図である。

(江村治樹)

言、典ニ関ワラザルハ

君子ノ所談ニアラズ

—— 禅の文化研究班 ——

考えること、発言すること、かならず古典の語句をふまえるというのが、わが東方形研究会の光栄ある伝統であるときく。

わたくしたち禅の文化の研究班でも、語句の出典調べが、まず第一の仕事である。過去三ヶ年、数人の有志が相い寄り、「伝灯録」三〇巻を走り読みすることで、一往の足なみを揃えたあと、「禅林僧宝伝」三〇巻の読み合せにかかって更に三年、都合六年生の会である。そろそろ、報告をまとめるべき時期に來ている。いまだにものもたしているのは、面目次第もないわけだが、多少の弁解がないわけでもない。

とにかく、出典調べに手間がかかりすぎた。出典のないことの確認は、あることの確認以上に手間がかかる。だいいち、諸橋轅次氏の大漢和辞典にも、佩文韻府にも出ていない、特殊な用語が多すぎる。口語や俗語も、問題である。經史子集の代表的なものは、大蔵經や道藏をも含めて、大半が訓詁のあるテキストをもつ。すでに、誰かが読んでいるわけだ。密度と信頼を別にする、訓

詁の伝統は四部共に同じ蓄積をもつ。禅の本にも、室町以来の成果があり、ある程度までは、辞典や年表といった工具も揃っている。

問題は、むしろ読書の態度である。学問以前のこのように、禅の本の場合は、あんがいその本質に關っているように思える。要するに、自分たちの本を特別扱いしない訓練である。禅の本は、読んでも判らない、読むこと以外に、何か特殊な方法があるといった、差別的先入感をするのである。出典調べの苦勞は、禅の本に限るまい。むしろ、今は事情がちがっている。例のコンピュータの導入で、漢字で書いてある本なら、どんな出典でも、いずれは機械にまかすことのできる日が、いずれは遠からずやってくる。問題は、その先にある。出典のある語句を、すべて洗いあげたあと、夫々の時代の新しい初出の語句を、出典があるのと同じように、自然に読みすすめることができるかどうか。出典を欠くことの多い禅の本は、そんな将来の学の試金石となる。

いってみれば、かつては年配がものをいった名人の勘を、すべて機械にまかせたあと、機械の読んでくれない語句を、自由に読んでくれる新しい名人を待つこととなる。一言、典ニ関ワラザルハ君子ノ所談ニアラズといわれた中国に、禅の本が登場するのは面白いことだ。禅の文化の研究班は、その存在自体に意味があるのでな

いかと思っている。

(柳田聖山)

国家と私人

——公共的価値の研究班——

公共的価値の研究班も三年目に入った。とはいえ「公共的価値」とは日本語としてはなお、なじみのうすいことばであると思える。この「公共的価値」はいちおう英訳は *public value* としておいた。しかしほとんどの魂胆は、この公共的価値ないし *public value* ということばで、ラテン語の *res publica* (国家とくに共和国) を連想させたかったのである。

res publica というラテン語は英語ではそのまま *republic* であるが、しかし *commonwealth* (共和国) とも訳され、ドイツ語では *Gemeinwesen* (国家) とも訳される。そしてこれらの語はすべて、ラテン語 *res publica* の原義である公の事柄、公の財産を意味し、そこから派生的に国家という意味をもつのである。

以上のような次第であるから、この「公共的価値」研究班は、場合によっては、国家論研究班というふうに解釈してもらって結構だし、またその線に沿っての研究発表もおこなわれた。しかし公共的価値というタイトル通りの研究、つまり「公共善」(*public good*, *public*

wealth) の研究も発表された。そしてこの場合は、政治学的というよりはむしろ価値論的、倫理的アプローチだということができる。

さて筆者自身はアマノジャク的に、「公共的価値」の反対概念である「私的価値」の分析にエネルギーを注いだ。私的価値は、これまたやはりローマ的な概念である *res privata* (私の事柄、私の財産) を連想させる。そしてこの *res privata* はまさに私有財産を意味する。古代ローマでは、市民の私有地は国家権力をもってして奪うことのできない市民に固有の権利であり、古代ローマ市民の自由の砦であると考えられていた。そしてこの思想は、王土、公地を原理とする中国、日本の律令的法思想や、共有、団体所有を中心とするゲルマン法思想とは異質なものであるといえる。とはいえ、ゲルマン人と日本人はともに *Privatburg* あるいは戦国城廓という装置を使って、自らの思想を乗り越え、ローマ法的思想を模範的に継受したといえるであろう。以上が筆者個人の詳しく証明したいテーゼであるが、できればこのテーゼに立って公共的価値に傾きすぎる国家思想やコミュニケーションの本性を分析したいと思っている。

(山下正男)

「情報の社会変動力」雑感

——一九世紀日本の情報と

社会変動班——

「情報と社会」研究班も発足以来はや四年目に入りまして。第一次の報告書も近々取りまとめの運びになっております。順調なる発展まずは御同慶の至りと言えましよう。

一九世紀の日本を主たる（例外多い）対象として、情報と社会変動の相関性を歴史的に探究すると言え、いかにも高度に理論的な研究が相次ぐように見えましよう。実際にはもちろん理論に縛られて歴史を見る眼を濁らせる愚を犯す人はいません。むしろ歴史の具体的事象のうちに素手とびこみ、虚心に情報と社会の相関について思いをめぐらせようとする開かれた精神が共通の信条となつています。その意味で「はじめに好奇心ありき」が当班のモットーであると言えましよう。

これまでのところ班員諸氏の探究方向は二つに区別できるようです。ひとつは、国内における情報流通の進展の社会史的意味という視角です。例えば、鉄道・電信・運河などの交通通信手段、公園や博覧会といった情報流通の場、官庁による調査刊行物や教科書といった活字メ

ディア、これらの社会変動力が注視されています。今ひとつは、言うまでもなく海外情報の摂取による社会変動という視角です。当班の主宰者・吉田光邦教授のそもその発想ではまずこちらが重視されていたのではないのでしょうか。先生は伝統技術研究の大家であらせられます。伝統技術が根をはる伝統社会内部の安定したエコロジを確知すればするほど、その崩壊の原因として外的要因つまり海外情報の侵入に眼を向けることになるのでしよう。

しかし四年近い共同研究の成果は、情報の一方的な社会変動力について疑念をいだかせるようになりました。日本人は情報のおかげでたやすく変身するには余りにもしたたかであり、日本社会もまた貪欲に情報を吸収するにもかかわらずその基本構造はなかなかかゆがらない、情報と社会変動との相関性といっても単純に前者から後者への一方通行ではないという思いがますます深まってきたのです。

そう思つて吉田先生の『技術文明と宗教』を読んでいると、「技術はそれが人間社会との適応性をもたぬ限りは活動することはできない。……つまり技術は既存の社会に対して決して革新の原理とはならぬ」という御言葉が見えました。海外情報はどれほど「革新の原理」たりえたのでしょうか。存外に、自己確認の触媒であつたという結論にならぬとも限りません。

（溝部英章）

旅

モスクワの秋と冬

竹内 実

モスクワは曇天がつづき、まるで京都の冬であった。案内書でおぼえた「スクーチナヤ・オーセニ」(憂愁の秋)を口のなかでくりかえした。

最初の日曜になって、空が晴れた。

レーニン丘から眺めた市の上空は、宇宙そのもののようひろがり、雲ひとつない。

そこで北京の秋空をおもいだしたのだったが、眼前の空の色は、北京の、みあげていと吸いこまれるような、無限に深い藍色とはちがい、淡い青色だった。

北京の空の色を、それは大陸の広漠たる大地の反映だ、ときめていたから、眼前の軽快な色が不思議だった。これも大陸を覆っている空ではないか。

やがて冬にはいり、雨がじくじくと降った。雨は暖く

て、外套を持参しなかった人間には、ありがたかった。ロシア人は「腐った冬」といっているを教えられた(ロシア語でどういうかは、ききもらした)。

しばらくすると、雪の降る日がつづいた。中国学図書館に通うため、わたしが勝手に「組合」駅と名づけている地下鉄駅から地上にでると、骨を刺す針金のような寒気を感じた。郊外に近いこのあたりは、レーニン図書館のある都心部より、気温が何度か低いようであった。時刻の帰路の寒気は、とりわけきびしかった。

しかし、少年時代に味わった、そのような大陸性の乾燥した寒さにあうことを、モスクワに期待してもいたから、わたしはむしろ好ましかった。しかし、さすがに、宿舎の自分の部屋にかえりつくと、ベッドに腰をかけ、暖房の温さが、からだにしみこむのを静かに待たなければならなかった。背骨や肋骨から寒気が去ってゆく気配もまた、久しぶりのことであった。

前年の一月に訪ねた北京は、砂塵とスモッグ、そしてホテルの部屋にまでたちこめる石炭の煙の匂いだった。匂いというより、それは鼻をさす物体だった。

忘れていたその匂いを想いだしてみると、ここでは、そのような煙の匂いにも、スモッグにも、であわないのだった。

さらに気がつく、ひとびとは研究室や会議室では煙草を吸わず、駅のホームでもそうであった。

わたしは、忘れていた研究所の会議や研究会をなつかし

くおもいだした。じっさい、それはなつかしく、あらためて、あたえられた二カ月のモスクワ生活が、どんなに貴重であるかを考えたのだった。

旅に病む

多 田 道太郎

とにかくキンタマを見せなさい。といわれて、私はほんとうに魂の消える思いがした。誤訳ではないか、誤解ではないか。とっさにそう思った。

そこで通訳の孔君に向って、ほんとうにキンタマと言っているのかどうか、しっかりとたしかめてほしいと言ったのである。

孔君は二十五歳の美青年である。おだやかである。物に動ずるふうはない。ええ、とかるく受けて、おもむろに女医に向ってペラペラ、ペタペタとしゃべった。女医も、動ずる色はなく、ペタペタ、ペラペラと受けこたえた。

さて、孔君は私のほうに向きなおり、気の毒そうに「やっぱりキンタマ、と言っております。キンタマを見せてほしいそうです」。

そうか、そんなに見たいか——と、こちらはもう半ば



多田道太郎氏、小川環樹氏、兪平伯氏、錢鐘書氏

取り乱している。それでも、大事なところの上部は手でかくし、下部の玉の部分のみ、こっそりと医者に提示したのは、われながら情けない男ぶりであった。

優柔不断である。ふんざりがわるい。男らしくない。

オランダなどでは身体検査に夫婦そろって行くと、夫婦ならそろって裸になれるといわれるそうだ。夫婦ならばずかしきこともあるまいという考えだが、医者が裸の夫婦の身体をさわる——というのは、日本ならりっぱな変態行為である。

西洋人には羞恥心がないのか。それとも、医者だから、ふつうの羞恥心は問題にしないのか。——というふうに、われわれ弱気な日本人学者は言っていたが、なに、西洋人だけではない、お隣の中国の女医さんも、患者の羞恥心など、いっこう構わぬようであった。

女医さんは、問題の個所をゆっくり撫で、もみ、ためすがめ、それから頭をふった。おかしい。まだ、はれていない。これからはれるであろう——と言っているらしい。孔君の通訳によると、小生の病気はオタフク風邪だそうである。

「オタフク風邪?」

そこでまた、ことばと病気との相関について、一悶着があった。オタフク風邪とはいかなる病気であるか、と小生が問うと、女医は笑って、先客のアフリカの子供を指さした。「あれと同じです」。見ると、その子供の頬は黒い風船のようにはれている。

大人のオタフク風邪はおそろしい。かならず、はれあがり、汝の生殖機能はなくなるであろう——と、おそろしい託宣であった。中国の女医さんの顔が、中世の魔女のように見えた。

蜀犬日に吠ゆ

森 時彦

四川盆地に住んでいる人間にとって、すみきった青空はこのうえなく貴い。この盆地にはなぜか四季を通じて雲の蓋がかぶっている。「蜀犬日に吠ゆ」は、中国式の誇大表現では決してない。

冬の成都では、氷がはることはまずありえない。人々は、室内が外気から断たれることを極度に恐れ、真冬でも窓を広々と開けはなしている。しかし、鉛色の低くたれこめた雲におさえつけられている外気は、十二分に湿気を含み、「京の底冷え」以上の寒さが容赦なく皮膚にまとわりつく。

そのうえ、北京時間とは実際には一時間近くの時差があるのに、律気に「中央」の方針に従う結果、冬の朝は夜明けとともに目ざめることも許されない。裸電球のかわい光の下で、けだるく須板にむかう人影を、向いの

窓に点々とみながら目ざめる憂うつさは、一日のはじまりにしては、あまりにものがなし。まして、四川名物の天然ガスは、寒さとともに弱くなり、^{グライボウ}「鬼火」(螢火)がバーナーのまわりを駆けめぐって、ついにはポツという音とともに消滅してしまい、電気も起きる家がふえるとともに暗さをまし、往々にしてこと切れてしまう時、人は闇と寒さの中で呪いのことばをはきながら、燦々たる陽光につつまれた朝にこいこがれる。

成都に暮した二年の間、旅は救いであった。ホテルでお湯をふんだんにつかって数カ月分の垢を洗いながす楽しみもさることながら、なによりもそこには忘れさっていた青空との出合いがあった。そのせいか、どの旅でも空ばかりが、やたらに印象に刻みつけられている。

四川盆地から抜けだす途は、大約五本(最近になって六本)ある。二週間をかけて雲の上の国にたどりつくチベット公路はさておき、他の四本は通ったことのある途だ。

なかでも、忘れがたいのは、やはり霧の町重慶から東方紅号に搭じ、三峡を抜け宜昌で湖北の大平原に遭遇するルートであろう。二百キロ以上にわたって巍然たる山が烟雲にかすむ両岸にそそりたつ三峡は、それ自体絶景であるが、四川から下ってきた旅人には、宜昌の手前にわかに天地が真二つに別れる景色の方がより驚嘆に値する。空とはかくも広く人間に授けられているものなのかと。



成都の街頭で特産の竹細工を行商する老人

昨年十一月に開通したばかりの襄渝鉄道（襄樊—重慶）に、このような趣きがあるかどうかは知らない。

成昆鉄道（成都—昆明）で雲南に出るのも、また格別だ。灰色にぬりこめられた成都を朝八時に発車した列車は、大渡河にぶつかるあたりから山の中にわけ入り、次第に高度をあげながら夜をむかえる。翌朝、強烈な朝日にいつになく心地よく目ざめた時、車窓からは赤い大地が一月というのに咲きみだれている菜種の畑をまじえながらなだらかに瀕池めざして下っていき、海でしか見たことのないコバルトブルーの空がそのうえをおおう雄大な光景がとびこんでくる。きっかり二十四時間（中国の汽車は一昼夜で約一千キロ走る）で、“別有天地”（別世界）の昆明に到着する。いま一つ、南方へのびる川黔鉄道（重慶—貴陽）は山国から山国への旅で、むしろ貴州から四川に入る方が感銘は深いかもしれない。

宝成鉄道（宝鸡—成都）についても、同じことがいえるだろう。西安のほとんど絶望的といってもよい黄土の世界から、一夜にして、湿り気をたっぷり含んだ烟緑の世界に運ばれることは、そうさらに味わえる経験ではないのだから。

だが、夏の日に宝鸡から隴海鉄道を西安とは逆の西に向った時、この見解は改めるはかなくなった。蘭州を過ぎ、夏なお雪をいただく祁連山脈を南に仰ぎながら、河西通廊をひた走り、長城の西端嘉峪関を抜けると、そこには人間と自然との関ざりなど夢想だにできない大地

があった。なお続く祁連山脈がわずかに視野をさえぎるのみで、二本のレールが自分の足もとから天と地の接点まで、まっすぐに残されていく光景を、デッキに立ちつくして眺めた。やけつく大地のこまやかな色彩の変化に比べ、天空は中心の紺碧が地表に近づくにつれて白みをますだけの大まかな変化だった。

柳園で列車を下り、瓦礫の砂漠を二三〇キロほどジープを走らせると、敦煌のオアシスが蜃気楼のように浮んでくる。莫高窟などより月牙泉で見た夕焼けに魅せられたのは、“蜀人”の悲しさであろうか。

日中の暑さを避けて、午後九時頃に敦煌の町を出た。莫高窟では断崖をなして切れる鳴沙山も、敦煌の南では、大小の砂丘を連ねながら、党河に長いすそをひたしている。その砂丘群の一角に、四囲の砂丘にいだかれた形で、名のとおり三日月形の泉がひっそりと横たわっていた。流砂にあらがいつつ砂丘の頂きにのぼると、昼間あれほど複雑な色あい呈していた砂漠は、濃淡のきつい茜色からやがて単調なトーンへと化していく。一方、空は昼間とはうってかわって、めまぐるしいばかりにその色彩を改めていき、十一時に至ってはじめて夜のときばかりがおりた。月牙泉は辛抱づよくその移りかわりを映しつづけていた。

かくも美しい一日の終りこそが、莫高窟の色彩豊かな芸術をはぐくんだのではないかとひそかに思う。それが証拠に、わが四川に唐代以来刻まれてきた大足石刻のいともどぎつい彩色を見よ（主に清人に責任があることは付言しておく必要があるが）。

おくりもの

一九八〇年度の人文科学協会助成金は、次の二氏におくられ、三月二三日に人文科学研究所において受賞式がおこなわれた。

1 佐治 芳雄氏

佐治芳雄さんは、一九〇七年東京で生れ、第一高等学校から東京帝国大学文学部国史学科へ進まれ、卒業後、読売新聞社に入社しましたが、健康をそねたこともあって太平洋戦争の前夜に退社、以後、社団法人全国地方銀行協会、社団法人日本食糧協会などの囑託をしながら、独力で歴史の研究を続けてこられました。その成果が『日本近現代史文献解題』（昭和五四年）『邦訳日本研究文献解題』（昭和五五年、いづれも宗高書房刊）ですが、内容がたしかであることはいうまでもなく、その上に、総合的な文献解題という難事業を個人が独力でまとめたということが特筆にあたいすると思います。佐治さんは、三十年間を、この二冊の本に賭けてきたといい、自らドンキ

ホーテの生涯であったといっています、むくわれることの少なかった篤学の老研究生に、人文科学賞を贈ることによって、今ささやかな支援の意をささげたいと思います。

2 川原 寿市氏

川原氏は明治三五年（一九〇二年）六月一日、徳島県の生れ。中学卒業後京都帝国大学文学部附設の臨時教員養成所に学び、狩野直喜氏の薫陶を受けて『儀礼』の研究に入る。爾後教師生活の間に研鑽を積み、『儀礼釈攷』の筆を起し、戦争末期より終戦後の経済困難に耐え、昭和二三年草稿を完成する。親ら原紙を切り、『儀礼釈攷』第一冊が油印刊行を見たのは昭和三十一年、以後逐年刊行を続けるも、原紙切りに川原氏夫妻体力を消耗し、昭和四一年遂に中断の余儀なきに至る。世は移り、新たに手書き平版印刷をもって京都、朋友書店より刊行のはこびとなり、昭和四八年第一冊を印行、昭和五三年目出たくこの畢生の大作（全一五冊）の刊行を終る。

その内容については昭和三十一年の第一次

刊本に寄せられた小島祐馬氏の序文を借りる。

川原君の研究対象は、一般の儀礼学者のごとく礼経一七篇だけを取ったのではなく、朱子の儀礼経伝通解の体例に倣って、十七篇以外「礼記」や「大戴礼記」や「春秋伝」その他雑書の中から、いはゆる曲礼に関する条項を抽出して来て、現存の「儀礼」の内容の不備を補った者のやうである。またその解説を見るに、先づ「訓詁」と「通釈」との項を設けて読者をして本文の大意を了得せしむるとともに、「通釈」中疑義の存するところは「釈攷」において詳細に訓詁と事実とを攷定し、「釈攷」中の難解の箇所はさらに別にこれを抽出して説明し、或はこれを図解するなど、一点の含糊曖昧を許さざる用意の周到さがうかがはれ、いはゆる楽屋落ちの弊に陥ることなく、全然経学の素養のない者でも、これを読んで容易に理解し得るばかりでなく、随処に多大の興味を惹く解説さへ無いではない。しかもその研究方法は「経をもつて経を解し」「子や史をもつて経を解する」「清朝経学者の方法に準拠してをり、従って

その解釈は概ね妥当であって、この頃の多くの古代研究のごとく牽強附会の跡は殆んど見えない。少くとも儀礼に関する限り、部分的にはともかく、全体に互ってかくのごとく精到な解釈をしたものは、日本では今日まで他に類例を見ないところであって、独り經学の世界において珍重すべき好著たるのみならず、民俗学や社会学の部門においても、その研究に資するところ蓋し尠少なからざるものがあると思ふ。

お客さま

五五年一月一九日～五六年三月一日

武漢大学歴史系教授 唐 長孺氏

(外国人研究員として)

同期間

武漢大学歴史系講師 胡 德坤氏

(外国人招へい学者として)

五六年一月一七日～三月三十一日

フランス高等研究院第四部名誉教授

マックス・カルタンマルク氏

(外国人研究員として)

二月七日

フランス高等研究院第四部教授

クリストフェル・シペール氏

(Schipper)

三月三日

中国社会科学院訪日代表团

团长 中国社会科学院副院长

宦 郷氏

秘書長 中国社会科学院外事局

副局长 王 剛氏

团员 遼寧社会科学院副院长

石 光氏

〃 中国社会科学院日本研究所

何 方氏

〃 吉林社会科学院副院长

石 静山氏

〃 中国社会科学院外事局幹部

李 克世氏

三月二五日

南京博物院院長 姚 迁氏

江蘇省文化局長 周 邨氏

五月一九日

モントリオール大学東洋研究セ

ンター所長 シャルル・ルブラン氏

(Charles LeBlanc)

五月二七日

中華民国文芸作家訪日団

团长 中国文芸協会常務理事

尹 光栄(筆名、雪曼)氏

小説家 鍾 肇政氏

中国文化大学教授、韓国現代

史研究 林 秋山氏

人のうこき

。井波(旧姓小濱)陵一氏を助手(附属東洋学文献センター)に採用(五五年一月一日付)。

。麦谷邦夫氏(名古屋大学教養部講師)を助教授(東方部)に採用(五六年三月一日付)。

。大前 真助手(日本部)は退職、龍谷大学講師に転職(三月三十一日付)。

。見市雅俊助手(西洋部)は和歌山大学経済学部講師に昇任(四月一日付)。

。飯沼二郎・渡部 徹・太田武男各教授は停年退官(四月一日付)又三教授は名誉

教授に（四月二日付）。

。飛鳥井雅道・古屋哲夫（日本部）梅原郁

（東方部）・山下正男（西洋部）各助教授は教授に昇任。

。前川和也講師（西洋部）は助教授に昇任。

。横山俊夫助手（日本部）は助教授に昇任。

。山本有造氏（神戸商科大学助教授）を助教授に採用。

。今井清助手（東方部）は講師に昇任。（以上四月一日付）

。戸田禎佑氏（東京大学東洋文化研究所助教授）を比較文化客員部門に併任助教授として受け入れた。

（五六、四、一〜五七、三、三一）

。チャールス・シュルダン氏（Charles Sheldon）ケンブリッジ大学東洋学部講師）を比較社会客員部門に客員教授として受け入れた。（五六、四、八〜八、七）

。大前真助手（日本部）は、五四年九月よりウオリック大学社会史研究センターで日英労働史の比較研究に従事していたが、その後研究を終了し、五五年一二月二六日帰国した。

。多田道太郎教授（西洋部）は、三月二日伊丹発、北京外国語学院で日本文学に關

する講演、北京大学等で日中比較文化の研究を終え、五月一日帰国。

。樋口謹一教授（西洋部）は、三月二七日成田発、四川大学、成都博物館、武漢大学等で日中政治思想史に関する研究及び資料収集を終え、四月一〇日帰国。

。田中淡助手（東方部）は、三月二六日伊丹発、南京工学院建築研究所で中国古代建築史に関する研究をし、五七年三月二五日帰国予定。

。桑山正進助教授（東方部）は、四月九日成田発、アフガニスタン国ミールバツチャコト郡庁タパリスカンダル遺跡等で、中央アジアの考古学的調査を終え、四月二七日帰国。

。森時彦助手（東方部）は、五五年三月一三日より四川大学で中国の歴史・文化を研究し、四月三日帰国。

東洋学文献センター講習会

昭和五十六年度

漢籍担当職員講習会

第一日（五月一八日）

経部書（講義）

漢籍の電算機処理について

第二日（五月一九日）

中国の書物

実習

第三日（五月二〇日）

史部書（講義）

実習

第四日（五月二一日）

子部書（講義）

実習

第五日（五月二二日）

集部書（講義）

実習

第六日（五月二三日）

討議情報交換

池田 秀三

星野 聡

尾崎雄二郎

富谷 至

杉山 正明

小濱 陵一

書いたもの一覽

一九六〇年二月〜一九八一年五月
(五十音順、●印は単行本)



・飛鳥井 雅道

●図説日本文化の歴史 12 明治(編著)

小学館 三月

孤高なる激情家・寒村翁

朝日新聞夕刊 三月七日

外国人の見た明治日本の再出発

歴史と地理 四月

天心と大観そして谷干城(岡倉天心全集月報8)

平凡社 四月

Toward a theory of revolution The Extended Wheel 四月

国民文学論のころから(竹内好全集月報3) 筑摩書房 四月

・天野 史郎

ボードレール『悪の花』その他の女性詩篇註釈(共同執筆)

人文学報 五十号 三月

・荒井 健

李義山七律集釈稿(一)(共同執筆) 東方学報 五三冊 三月

解説・吉川幸次郎『阮籍の「詠懷詩」について』(岩波文庫) 四月

・飯沼 二郎

バッハの音楽 同朋 二月号

織田櫓次先生のこと 教団新報 二月一三三

国家権力と内村鑑三(『内村鑑三全集』八巻・月報)

対談・農業・エネルギー問題を考える(槌田勁と)

解放新聞 一〇〇三、一〇〇四号 一月五日、一九日

日本の食糧自給と国際競争力

機械化農業 一月

滋賀県の公立学校教育と国籍条項 解放教育 一三一号 一月

神の怒りと神の崇り(ジュリスト増刊総合特集)

『現代人と宗教』

有斐閣 一月

座談会・在日朝鮮人文学をめぐって(金石範、姜在彦、

小野誠之、大沢真一郎、鶴見俊輔、日高六郎と)

朝鮮人 一九号 一月

在日朝鮮人市民権運動の十年

朝鮮人 一九号 一月

江戸時代の農学者から何を学ぶか

農業と経済 二月

雑誌『朝鮮人』を出しつつけて

季刊三千里 二五号 二月

日本における型の発達

人文学報 四九号 二月

福岡農法の成立

農業史研究会会報 一〇号 三月

・井上 章一

談義近代日本関係洋書(三)(共同執筆)

人文学報 五〇号 三月

・上田 篤

私は「住まいづくり」をこう考える

hot line 1 一月

藤沢市「太陽の家」水彩壁画の試み

建築文化 三月

備北モデル定住圏における文化施設等の広域的システムの

あり方に関する調査

日本都市計画学会 三月

空間を節約するツボグルマ

科学朝日 四月

現代都市の「鎮守の森」 ポートアイランドへの招待

四月

おおさか・文化・ルネサンス 教育文化研究所 五月

人工の島・神戸ポートアイランド 諸君！ 五月

・上山 春 平

『周礼』の六官制と方明

東方学報 五三冊 三月

礼と戒律

無限大 五三号 四月

●城と国家

・宇佐美 斉

書評・清岡卓行『駱駝のうへの音楽』

週刊読書人 一二月

啄木の『ローマ字日記』について

図書新聞 一月

解説・アラバール

日仏技術 四月

翻訳・イヴ マリ・アリユー『戦後詩を読む』

ふらんす 四、五月

・梅原 郁

宋代銓選のひとこま——薦挙制度を中心に——

東洋史研究 三九—四 三月

宋代の印刷・出版

NHKラジオ学校放送 五月

・江村 治 樹

●夏熊『中国考古学研究』（共訳）

学生社 三月

戦国・秦漢簡牘文字の変遷

東方学報 五三冊 三月

・太田 武 男

内縁保護の現状と今後の問題

家庭裁判所月報 三二卷一〇号 一一月

現代家族法の課題と展望

人文学報 五〇号 三月

Die jetzige Lage des Rechtsschutzes für "Naien"

— Beziehung und Künftige Problem ZINBUN No. 17

●親族法概説

有斐閣 三月

・小野 和 子

書評・アイダ・プルーイット『漢の娘』

日本読書新聞 一月一九日

『萬曆邸鈔』と『萬曆疏鈔』

東洋史研究 三九—四 三月

・川勝 義 雄

L'aristocratie et la société féodale au début des Six

Dynasties ZINBUN No. 17 五月

・桑山 正 進

インダス文明のありかた

パキスタン 四五号 四月

・阪上 孝

アルチュセール、構造主義

現代マルクス・レーニン主義事典（上）社会思想社 一二月

・佐々木 克

天皇の私的空間

歴史公論 一月

仙台藩タカ派の事情 歴史への招待 14

日本放送出版協会 四月

・竹内 実

モスクワの銭湯

ソ連における中国の影

歴史と現代

The Friendship-Myth and Reality

JAPAN QUARTERLY Vol. XXVIII No. 1

January-March

天心の詩とモスクワ

モスクワで北京を考える

中国の権力闘争を考える

中国の権力闘争と安定

中国の変動

●魯迅周辺

新緑の連想

社会主義国で何が問題なのか(談)

・多田 道太郎

ボードレール『悪の花』マリー・ドープラン詩篇註釈

人文学報 四九号 二月

ボードレール『悪の花』その他の女性詩篇註釈

人文学報 五〇号 三月

Sacred and Profane: the Division of a Japanese Space.

ZINBUN No. 17 五月

●文章術

のんびり写真館

潮出版社 四月

マイトタイム 四号 四月

・谷 泰

地球的規模での同調行動(中日評論)

婦国子女のとまどい(中日評論)

文化的混住でのめまい(中日評論)

日本的リーダーシップ(中日評論)

●錯乱と文化—精神医学と人類学との対話(共編)

マルジュ社 六月

各個研究メモ「羊への呼びかけ」

民博通信 一三号 六月

●奉法要索引

翻訳・夏鼎「武威唐代吐谷浑慕容氏墓誌」

中国考古学研究 三月

・羽賀 祥二

「玉」としての天皇

明治神祇官制の成立と国家祭祀の再編(上)

人文学報 四九号 二月

・狭間 直樹

●歴史科学協議会編『歴史科学大系 一四 アジアの変革』下

(中国近代史における「資本のための隷農」の創出とそ

れをめぐる農民闘争、再録) 校倉書房 一二月

「民」を軸とした奮闘の記録(『中国近代史』三省堂推薦

文) 朝日新聞 四月二三日

・林 巳奈夫

辛亥革命と日本留学生

朝日新聞 四月二三日

良渚文化の玉器若干をめぐって MUSEUM 三六〇号 三月

殷、西周時代礼器の類別と用法 東方学報 五三冊 三月

殷、西周時代の地方型青銅器 考古学メモワール 五月

・樋口 謹一 思想の科学 五月

丸山真男のファシズム論

・福永 光司 日本禪と中国禪 (二) (鼎談) 五月

観音経と道教 (講談社『日本の禅語録』月報) 一月

岡倉天心と道教 (平凡社『岡倉天心全集』第八卷解説) 二月

・松井 健 観音講座だより 二〇号 二月

書評・S・ギーディオンの『機械化の文化史——ものいわぬもの』 四月

の歴史——』 季刊人類学 一一卷四号 一一月

コメント・秋道智弥「嵐の星と自然認識」 季刊人類学 一一卷四号 一一月

談叢近代日本関係洋書 (二) (共同執筆) 一一月

Studies in Ryukyu Folk Biology: Part II Kurima 人文学報 四九号 二月

Ethno-ichthyology ZNBUN No. 17 五月

・宮 峯 法子 作品解説・図録『泉屋博古——中国絵画・書』 五月

・村田 裕子 泉屋博古館 五月

何其芳のおもいで (陳荒煤の追悼文の翻訳と解説) 東亜 二月

翻訳・解説・故宫名鑑 (耿宝昌) 淡交増刊号 一月

翻訳・解説・故宫博物院の名陶 (郭芳為) 同 右 一月

翻訳・唐様茶会 (胡錫年) 同 右 一月

翻訳・唐宋以来の喫茶の風習と茶器の変遷 (馮先銘) 同 右 一月

・柳田 聖山 今月のことば 花園 一一月—五月

禅語コーナー 同 右 一一月—五月

霜葉は二月の花よりも紅い (古寺巡礼近江 永源寺) 一一月

殺仏殺祖これ真宗—森竜吉さんのこと 東洋思想 第八号 一一月

鳩摩羅什の舌 (文学座公演 水上勉作「雁の寺」) 文学座 一一月

日本宗教、そのタブーにせまる道元、一一二〇 中外日報 一一月—一月

幻想の古代吉備津王国 山陽新聞 一月五日号

堅田の一休 湖国と文化 一五号 滋賀県文化体育振興事業団 一月

一年の計 清泉 一号、大本山国泰寺 一月

●雪竇頌古 (禪の語録一五、入矢義高、梶谷宗忍と共著) 筑摩書房 二月

格に入りて格を出づ (禅語の発掘その一六、同右月報) 筑摩書房 二月

不立文字の世界 言語生活 三五〇号 筑摩書房 二月

教壇ということ 禅文化 一〇〇号 禅文化研究所 二月

一休和尚の禅と文学——蒼生ヲ説カズ美人ヲ説ク—— 二月

青淵 三八四号 渋沢青淵記念財団竜門社 二月

まゆ——らに寄せる言葉 まゆ——ら 五〇号 まゆ——ら社 二月

現代史としての道元 中外日報 三月二十八日号 四月

福島俊翁著作集と続笹鳴 恩師福島俊翁先生 四月

日興万銭(禅語の発掘その一七、禅の語録 一四卷月報) 筑摩書房 五月

矢淵 孝 良 淡交 増刊号 一月

翻訳・芸苑「茶・詩・泉」 淡交 増刊号 一月

山下 正 男 淡交 増刊号 一月

●ペトルス・ヒスパニアス論理学綱要——その研究と翻訳——

人文科学研究所 二月

宇宙観の社会的基礎 創造の世界 三八号 五月

論理学と数学——特にアリストテレスの場合における 理想 五月

●山 本 有 造 商大論集 三二卷五号 三月

明治初年の「円」 商大論集 三二卷五号 三月

●横 山 俊 夫 ヴィクトリア期イギリスにおける日本像形成についての覚書

△ⅡⅤ——L・オリファントとエディンバラの出版社 人文学報 五〇号 三月

ブラックウッド—— 人文学報 五〇号 三月

●吉 川 忠 夫 月刊百科二二三 平凡社 五月

寒食散と仙薬 月刊百科二二三 平凡社 五月

●吉 田 光 邦 宋胡録のふるさと 旅 一二月

宋胡録のふるさと 旅 一二月

デザイン二〇年の変遷とその社会的背景

大阪デザインセンター二〇年記念誌 一二月

●漆器入門(編著) 淡交社 一月

シルクロード調査日記 知識 一月

日本のクラフト紹介による文化交流 ジャパンスタイル展報告 二月

京の女人風俗 京のれん 二月

鍊金術と鍊丹術 日本自身 三月

京の美 美しい日本 六月

幕末の技術開発 歴史への招待 四月

Japanese handicraft (1) Komichiwa No. 4 四月

●日本の博物館——13(編著) 講談社 五月

中国の工芸 家庭画報 一二、一月

耽書さまざま 月刊染織 三、四月、五月

喜・住・逢 華道 一、二、三月

技術史の一断面 三省堂ぶつくれつと 一、三、五月

●渡 部 徹 座談会(松井久吉・大源実・寺本知) 戦後の運動をふりかえ

る 解放新聞 一〇〇号 一二月一五日

特高・留置場・軍隊(下) さんいち 一二月 一月

自治研部落解放分科会活動の総括 月刊自治研 二五六号 一月号

●一九三〇年代日本共産主義運動史論(編) 三一書房 二月

座談会(栗原幸夫・伊藤晃) 赤色労働組合主義の思想的検討 運動史研究 七号 三月

書評・大串夏身『近代被差別部落史研究』 明石 二号 三月

書評・大串夏身『近代被差別部落史研究』 明石 二号 三月

